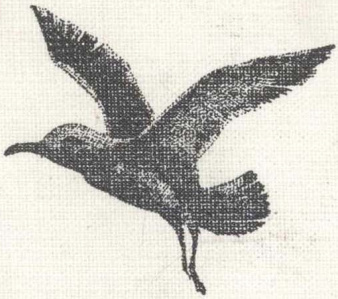

井上光晴第三作品集 4

勁草書房

井上光晴第三作品集 4

1980. 5. 20.　第1刷印刷
1980. 5. 25.　第1刷発行

著　者　井上光晴

発行者　井村寿二

発行所　株式会社 勁草書房
東京都文京区後楽2-23-15

印刷　港北出版印刷

製本　和田製本工業

© 1980 Printed in Japan.

＊落丁・乱丁本はお取替えいたします.

＊定価は外函に表示してあります.

＊無断で本書の全部又は一部の複写・複製を禁じます.

0393-883400-1836

井上光晴第三作品集4　目次

I　黒縄　3
黒縄　4
天皇という時間　92
静かな生活　105
水路　111
海燕　114

II　漂泊の愁いを叙して成らざりし　119
漂泊の愁いを叙して成らざりし　120
高橋和巳との架空対談　137
「髑髏銭」と「神州纐纈城」　147
フォークナーと私　151
スターリンとの架空対談　164
一九五六年秋　173
魯迅日記　175

弟子・闇市のかなしみ 177
わが碁敵・橋川文三 181
大場康二郎 182
涯子へ 186
黒谷村幻想 189
二・二六事件と『憂国』 191
人間の運命 193
不機嫌なそして優しい孤独 196
日記のなかのサルトル 197
Ⅲ 木・竹紀行 201
阿蘇単独旅行 202
木曽民宿の明り 209
壱岐焼酎幻想行 216
木・竹紀行 223
旅宿の皿 240

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

〔解説〕井上光晴と文学伝習所 243
解題 267
装幀・上口睦人

井上光晴第三作品集

4

I

黒

繩

黒縄

赤陣とよばれる杉山の社からとうとうとひびく祭り太鼓の音は申しわけのようにつづいていたが、昨夜半というより明方近く不審火をだして全焼した前畑精一の母屋と細工場の余燼は火葬場のような臭気を黒髪皿山部落一帯の屋根屋根にじっとりとおおいかぶせていた。八月だというのに天候は一向にはかばかしくなく、もう十日余り、降ったり止んだりの日々を繰返しているのだ。伊万里街道の方角から種畜場をこえて、ときおり吹き上げてくる湿った風は、その臭気を消すどころか、かえって生臭く色濃いものにした。

「おばさん、そこをしめてくれませんか。まだ暑い方が辛抱できる」一度手に持った盃を食膳において、古場光雄は叔母の佐乃に声をかけた。

「なにせ、いっぺんに夫婦二人、それも生きとるまま焼け死んだとだから、こりゃちっとやそっとでこの匂いは消えんでしょうなあ」坂上明正は舌をぴしゃっといわせた。畳敷の広間から一段下った板の間で彼はふるまい酒を飲んでいた。

「むごいことになんなさったねえ。あんな死に方なさるような人じゃなかったが……」そこから赤陣のみえる広間の障子を閉めた手を頬にやって佐乃は顔をしかめた。

「こういうことはちょっとないなあ」坂上明正は大きい頭を振った。「いくら恨まれとったからといって、火をつけられて焼き殺されるというのは、考えられんことだからねえ」

「つけ火か何か、まだわからんとでしょう」佐乃はいった。

「精一さんは人から恨まれるような人じゃなかったから……」

「そりゃ、そう」坂上明正は簡単に相槌を打った。「まあ、いまのところ火は外からつけられたか、内からでたかわからんらしいが、どうもこりゃ大事の祭りになってしもうたねえ」

「何の因果かねえ、選りにもよって……」

「内から火がでたとすれば自殺ということになるが、みんな浮かれとる祭りの日に、まさかそんな夫婦一緒に手のこんだ死に方をするかなあ」

「精一さん夫婦が自殺したといわれるとですか」

「いや、そうじゃなかろうというとるんですよ」坂上明正は小皿の味噌漬をつまんだ。

「おばさん、明正さんの酒をみて下さい」

「いや、もうこれで充分」

坂上明正は古場光雄の方をむいて頭を下げ、佐乃は替わりの徳利を彼の前においた。

「どうも、昼間からこれじゃ……」坂上明正は口の中でそう呟いたが、手にすぐ新しい徳利をとった。そして盃を傾けると彼の言葉は前よりも軽くなった。「内から火はでとらんとすれば、つけ火ということになるが、だれがそういう大それたことをしたか。常日ごろ、精一さんを恨みに思うとった奴はだれか。警察じゃきっとその辺のことを調べよるなあ……」

「この部落につけ火をした者がいるといわれるとですか」

「いや、そうはいいよりません。しかし内からか外からか、どっちにしても火はでとるとだから、警察じゃその辺まで調べるかもわからんというとるとです」坂上明正は理屈をこねるような声をだしたが、すぐまたそれをもとに戻した。

「つけ火じゃないとすると、やっぱり内からでたのかねえ。……」

佐乃が何かいいかけようとしたとき、泉田隆が足早に入ってきた。

「あ、光雄さん、おんなさったですね。ちょうどよかった」

古場光雄は何かというように、四年ほど前、先代が亡くなるまでここで働いていた古い工人をみた。「つけ火のことでひとつ相談しといた方がよかろうということになって、それで栄三さんのところに集まってもろうとるんですが…」泉田隆は視線をそらして窯元の集合を告げた。

「つけ火にきまったとですか」

「ああ、明正さん、きとんなさったとですね」泉田隆はわざと、今、気がついたというような目で坂上明正をみた。だがそれ以上何も返事をしなかった。

「警察じゃやっぱりつけ火だというとるんですか」

「それじゃたのみます」泉田隆は坂上明正の声を置き去りにして出て行った。

「なんだ、顔役みたいな面して。……」坂上明正は悪態をついた。

「つけ火というとらしたが、そんなことがあるもんかね」

佐乃はしきりに片方の手の甲をこすった

「まだ何もわかっとらんのに、自分だけわかっとるような顔しとる」

「明正さん。ゆっくりしといて下さい」古場光雄は立上って、坂上明正の方をむいた。

「おおきに」

古場光雄は服に着かえるために長持の置いてある暗い次の間を通り、自分の部屋に行く途中で、おやというふうに足を止めた。右手の階段を上った二階の部屋から話し声のようなものがきこえてきたからである。姉のところにだれかきているのか。彼はしばらくそこに立止って二階の気配をうかがったが、それっきり物音ひとつしなかった。

やはり錯覚だったのだ。姉をたずねてくる人などいるはずがない。着物を脱ぎ、半ズボンをはきながら古場光雄は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

そう思った。二年前の夏。そのときのできごとがありありと彼の脳裏をよぎる。

はじめ、妙法寺の住職によってその話が持込まれたとき、姉の弘子はいまさら再婚などと言葉ではしぶったが、本心はむしろ昂ぶったようすにみうけられた。戦争末期、数え年二十歳で陸軍経理将校に嫁ぎ、わずか二カ月余の結婚生活を過ごして、敗戦と同時に離婚という、ただそれだけの過去を持つ彼女に、どういうわけかそれまでついぞ縁談はなかったのである。別に体がわるいわけでもなく、まずは十人並の器量を持ちながら、他人の方が不思議がるほど不縁のままであった。三十を過ぎたころ、それとなく唐津の金物商の後添いにどうかということはあっても、そのうち、相手の男の年が違いすぎるからと、話をだした方でそれをひっこめた。

そういう事情のもとで話はすすめられ、伊万里のさる料亭で弘子は見合いをした。五歳になる娘を持つという相手は、兵隊にもとられず、博多でずっと商事会社の事務員をしているという経歴の、どことなく力のない感じの男だったが、彼女は再婚を承諾した。話がきまると、男はときおり黒髪皿山まで上ってくるようになり、彼女の部屋から笑い声などもきこえるようになった。しかし、ある日、前ぶれもなくあらわれた住職は固い顔をして、この話はなかったものにしてくれという男の意向を伝えたのである。

理由は何か、と弘子は割合はっきりした口調で住職に問うた。そして、それについては何にもきいておらぬ、ただそういう意向を伝えてくれとたのまれただけと住職がこたえたとたん、彼女は低い、息をするような声で笑ったのだ。それっきり、彼女はろくにものもいわなくなった。

半袖と半ズボンに着替えた古場光雄はふたたび広間に戻り、坂上明正に会釈すると、土間に揃えてある下駄をつっかけて外にでた。

「大事になりました」公孫樹の下で行交った樋口定春が挨拶した。彼もまた先代が生きていた時分は黒髪窯の細工人であった。父親の一周忌のとき、集まった窯元やそれまで黒髪窯で働いていた細工人たちにむかって、今後は自分ひとりで納得のいく窯を精いっぱい焼くつもりですと宣言して、咳払いの一つもでそうな空気が満ちたとき、「手の要るときはいつでもそういうて下さい」と申しでた男である。

「ご苦労さん」古場光雄は挨拶を返した。

「火事場に行きなさるとですか」

「いや、そのことで栄三さんの家に寄合いがあるものだから」

「ご心配なことです」樋口定春はいった。

「一度ゆっくり飲みにきませんか」

「はあ、おおきに……」樋口定春は口ごもるようにして去った。

古場光雄はそこから左手に下がる石段を下り、両側に金柑の木の並ぶ道を通って、さらにだらだら坂を歩いた。小

橋を渡ると奥栄三の家があった。
「ご心配です」「ご心配なことです」と、すでに集まっている五人の窯元たちが古場光雄に挨拶したが、泉田隆の声はとどかなかった。
精一さんは怨恨をうけるような人じゃなかったが、どうしても火つけがあったとしか思えない。という、結局はそこに落ちついてしまう窯元たちの何の解決にもならぬ相談事をききながら、実のところ、古場光雄の心はそこにはなかった。自殺か他殺か、そんなことはどうでもよいのだ。そんなことは警察に調べさせればよい。彼にとっては二日後の窯出しこそが、今日まで耐えしのんできた仕事、いや運命のすべてであった。
「光雄さん、あなたの考えはどうですか」
「は」彼は声をかけてきた黒門透の方をむいた。
「精一さんのことですたい。考えがあるとならいうて下さい」
「別に何もありません。警察が調べとるなら、それにまかせたらどうですか」
「警察にまかせろといわれるとですね」
「警察にまかせられんから、こうして相談事をしよるとじゃないですか」泉田隆が黒門透の言葉につっかかった。
「しかし、そうするより仕方がなかでしょう」古場光雄はいった。実際には自分にむかっている泉田隆の声をうけとめるように。
「どうしてですか」
「どうしてといわれると困るが、火つけかどうかここでいくら詮議しても仕方がないでしょう。そういうことは警察が調べることだから」
「じゃ、あなたは、この皿山から火つけ人がでても仕方がないといわれるとですね」
「この皿山に火つけ人がおるかどうかわからんが、もし精一さんのところの火事が火つけで起きたのなら、火つけ人がおってもしようがないでしょう」
「そりゃ理屈ですよ。あなたのようにいわれたら、相談事もなにもいらんことになる」泉田隆はそういうと、マッチを何度も擦って煙草に火をつけた。
しばらく沈黙が流れ、理屈しかないでしょう、それとも火つけ人をかくまおうとでもいうんですか、という言葉を古場光雄はのみこんだ。
「むずかしい問題になった」やがて黒門透はいった。
「警察はどこまでも追及しよるやろうからねえ」神沢俊雄はいった。
「精一さんもまた、とんだ恨みを買うとったもんだなあ」新井玉介はいった。
「恨みとかそんなことじゃなかろう」神沢俊雄は声を立てた。
またしても堂々めぐりか。古場光雄は目を閉じた。何もかも明後日になれば判明する。おれがどんな窯を入れたか。

どのような匂いの壺と皿を作ったか。窯からだされた碗をみて、この窯元たちは何とほざくか。いやこいつらにはわかりはしないのだ。彼はあふれるような思いをおさえた。

「そりゃいいとしても、精一さんの息子が戻ると大変なことになるぞ」

「精太郎はいつ帰ってくるとかね」

「いくら精太郎が戻ってきても、ああまで丸焼けになっては、何も手につかんじゃろう」

「精太郎のことはまあそれとして、この始末をどうつけるかね」

窯元たちの声は交々につづいていたが、古場光雄はもうそれを耳にとどめなかった。祖父・古場光内が一代がかりで作りあげた碗を人びとは「黒髪」と名付けたが、親父の光吉ではなく、それは今、おれ自身の手でうけつがれ、さらに磨きをかけられるのだ。まだ生きていた時分、「お前の釉薬をかけられた素焼はみんな泣きよるぞ。こんなモダンガールみたいな厚化粧つけられたら、恥ずかしゅうてよう歩けまっせんちゅうてな」と嘲笑していた祖父が、今度窯出しされた染付碗の艶をみたら何というだろうか。

先代の光吉は、柳宗悦の素朴な理論を信奉して、祖父・光内の天才を否定した。「民衆から転じて個人作家に来るとき、そこに見出されるいちじるしい特質は、無心から意識への推移である。没我より個性への傾向である。器より見るならば日常品より貴重品への転向である。一言でいうなら工芸より美術への進展である。しばしば名付けられたようにそれは〈工芸〉といわれずして〈工芸美術〉と呼ばれる。しかしこの推移は私たちに何を語っているか。未来の工芸は〈工芸美術〉でなければならぬか。また〈工芸美術〉でなくば美しき工芸と呼び得ないか」という柳宗悦の単純な定式をうのみにして、祖父が骨身を削った形も色艶も何ひとつ発展させようとせず、そればかりか、染付も赤絵も泥臭い伝統に戻してしまったのだ。

親父は酒色に明けくれる奔放な祖父・光内の生活に反撥して、そのまるで代数でさえもない、足し算のような民芸運動の公式にしばられてしまった。

「工芸から〈工芸美術〉に転ずるとき、そこには必然的に絵画的（もしくは彫刻的）要素がいちじるしくなる。進んで言えばかかる美術的要素がその作品の主要な価値に転ずる。私は例証にはいってこの傾向を指摘しよう。例えば著名な個人陶工として乾山を選ぶとする。もし彼の焼物からそこに描かれた絵画を取り去ったら、何が残るであろうか。絵画が彼の焼物を支える力である。素地とか釉薬とか、私はそこに卓越した彼を見ることができぬ。彼の焼物は私たちに、彼が陶工たるよりさらに画工であることを告げてはいまいか。実際彼の筆画、特に彩画に転ずるとき、彼は常に陶工たる彼よりも偉大である。彼の純粋絵画は彼の陶器より遥かによい。これは彼が工芸家たるよりも、いっそう美術家であったことを告げるであろう。

柿右衛門を選んでもそうである。私達は（無地もの）の世界を柿右衛門の中に連想することができるであろうか。彼の価値はほとんどすべて絢爛たる赤絵に集しているではないか、もしその作品の絵画的要素がなかったら柿右衛門の存在はなかったであろう。あの仁清もまたこの例に洩れることができぬ。いかに彼の焼物の上に描いた彩画が彼の名を集めているであろう…」

彼は父の光吉が酒に酔うたびに呪文のように繰返すその文句をほとんど暗誦していたが、それに心を衝たれたことはなかった。柿右衛門の価値が「ほとんどすべて絢爛たる赤絵に集中して」いたとして、なぜそれが工芸の名において批判されねばならないのか。「無地もの」の世界を柿右衛門の世界に連想することができないのは、あたりまえの話ではないか。しかも柳宗悦は、光悦の人格の偉大さに比して「彼の作物にはなおも作為の傷が残る」と言い、「優に一禅家の位ある人」乾山の生涯で、一番価値の少ないのは「彼の遺した工芸品」であることを前提として、驚くほど矛盾に満ちた断定を下してしまうのだ。つまり、人間としてみるなら、教養ある個人作家の方が「無学な工人たちより」上だが、作物よりみれば個人の作より無学な工人の作った民芸の方が上だというのである。

教養のある個人作家の方が、なぜ無学な工人たちより上なのか。民の美を説きながら、なお「教養ある個人作家」を人間として、「無学な工人たち」よりすぐれているとするそこに柳宗悦の鼻もちならぬ裏返しの貴族主義が露呈している。……

彼は次第に波打ってくる身中の昂奮をおさえきれぬように、父、祖父が黒髪窯に賭けた生涯をたぐり寄せたが、そのとき、思いを断ち切るような声がかかってきた。

「光雄さんは知っとりますか」

「えっ、何をですか」彼は顔をあげて黒門透をみた。

「たしか、先々代のときにお宅から火のでたことがあったとでしょう」

「先々代というと光内のときですか」

「はい、そうきいとりますよ」黒門透は何本も皺のできている顔をくしゃくしゃにするようにして目ばたきした。

「さあ、それは初耳ですが……」古場光雄は言った。

「そのときもつけ火だったらしいが、あれはどんなふうに始末をつけられたものか……」黒門透の声は途中で細くなった。

「そんなことがあったとですか。何もきいていませんが。……」彼はいった。

「ああ、おれもきいたことがある。あれは……」新井玉介はあとの半分を口の中でもそもそと呟いた。

「光雄さんはほんとに何もきいとらんのですか」

「ええ、何も知りませんでした」古場光雄はこたえた。

「それでもおかしいですね。そんなことがあったとなら、どうして今まで話してくれなかったか。……」

「わたしもじいさんからきいたことがあるような気はするが、何もおぼえとらんねえ」神沢俊雄はいった。
「黒門さんは今、つけ火だといわれたが、だれがつけたのですか」彼はきいた。
「わたしもきいた話だから……」黒門透は言葉を濁した。
「そりゃ早速、帰ってからばあさんにきいてみますよ。いくら耄碌しとっても、そんな大事なことはおぼえとるでしょう」彼は言った。それは確かなことか。もし事実あったことなら、そんな話をそれまできかないはずはない。
「どうしますかね」
「このまますましてしまうわけにはいかんでしょう」泉田隆はあおるような声をだして一座を見回した。
「何かきめとくことでもあるとですか」古場光雄は言った。
「精一さんの家になぜ火つけがあったか、打合わせしとくために寄合いしたとですから、このまま開きにしてしまうわけにもいかんしねえ」泉田隆は同じことをいった。
「しかし、それは警察が調べることじゃないですか」
「それじゃすまん、警察にまかしておいてはとんでもないことになるというとるんですよ」
古場光雄は馬鹿らしくなって立上った。
「ちょっと用事を思いだしましたので、途中ですが立たしてもらいます」
あっけにとられている綜元たちをあとにして彼は奥栄三の家をでたが、敷きつめられたハマ（本焼きのとき、器物の下に敷くまるい台）の坂道を上って行くうち、さっきまでの昂揚した気分とは反対に、ひどくめいりこむような感じに襲われた。
家に戻ると母屋の前を素通りしてまっすぐ、彼は先代の絵付場だった離れにむかった。そこの階下には祖母サクが寝たきりでいた。
「ばあちゃん、気分はどうね」彼は大きな声をだした。
サクは小さい犬のような顔をゆっくりと持ちあげた。
「ばあちゃん、わかるね」
「ああ、光雄さんか、ようきたねえ」彼は起き上ろうとするサクの背中を支えた。「光雄さんはずうっと家で働きよったとね」
「ずうっと家におった」
「佐乃さんはまだ家におらすとやろか」
「ああ、家におってよ」彼はこたえた。この部屋に三度の食事を運んでいるのは叔母の佐乃なのだ。
「佐乃さんは遠慮のないお人だからねえ。愛さんが生きとるときはまだよかったが死んでからまでずうっとここに居着いてしもうたとだから」サクはくせになっている陰口をはじめた。
「ばあちゃん、ちょっときたかことのあるとよ」
「愛さんも気持の激しかお人だったが、佐乃さんも負けず劣らずの気性もんだから、しまいにはどっちが本当の嫁かわからんごとなったもんねえ」

「ばあちゃん、きこえるね」
「ああきこえるよ。光雄さんの言うことはようきこえる」
サクはうなずいた。
「じいさんのころに、家に火事のあったことは知っとるね」
彼はサクの耳に自分の口をくっつけるようにして言った。
「じいさんのころ……」
「ばあちゃんが。この家に嫁にきてから火事があったとね」
サクはわからんというふうに、ゆっくりと頭を振った。
「火事があった。……じいさんの時分、そんなことはなかったね」
「じいさんの時分はよかったよ。じいさんの染付にかなうものはだれもおらんやった」
そんなことじゃない。彼は苛々して舌打ちした。
「火事、きこえるね、ばあちゃん」
「ああ、きこえるよ」
「さっきそんな話をきいてきたが、じいさんの時分に家から火事がでたということは本当ね」
サクは前と同じように何もいわず、頭を振った。
「黒門さんは、じいさんの時分に家に火つけがあったといわした。そうじゃなかとね」
「じいさんの時分に生きとる者はもうだれもおりゃせんよ。……」
「え」彼はきき返した。「だれもおらんからどうした」
「もうだれもおらんし、何にもわからんごとなってしもうたからねえ」
「何がわからんごとなった。え、家に火つけがあったということは本当のことね」サクはまた頭を振った。そして
「わからんねえ」と呟いた。
「ばあちゃん」彼は一言一言区切るようにしていった。
「ようききなさい。なんにも隠し立てすることはないよ。じいさんの時分に火事があったならあったとはっきりいいなさい。……ばあちゃん、おれのいうとることがわかるね」
「何も、責められることはしとらんよ」
「えっ」
不意にサクの口からでた強い言葉に彼は愕然とした。
「ばあちゃん、どうしてそんなことをいうとね。だれもばあちゃんを責めたりはしとらんのだから……」
「じいさんはだれからもうしろ指をさされるようなお人じゃなかった」
「それはわかっとる。ただ、おれがきいとるのは…」
「ああ、体がきつうなってきた」
サクは目をつぶると、前かがみになって両手をつき、それから右の手を抱きこむようにして横になった。
サクのしぐさは老碌というよりどこか不自然なものにみえた。古場光雄はしばらく身動きもせぬ祖母の横顔を眺めていたが、やがて立上った。彼が母屋の土間にはいると、板の間で冷麦をすすっていた佐乃がおやというふうに箸をおいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com